

梵鐘をめぐる日中文化交流 ——杭州岳王廟鐘を中心に

邱 吉

要旨：岳王廟鐘は、清末の実業家である胡雪岩（1823～1885）が日本から持ち帰って岳王廟に寄進した日本鐘である。本稿は、杭州岳王廟鐘をめぐる、実地調査及び収集した文献資料に基づき、鐘の現状、渡清の時代背景や梵鐘による日中文化交流などについて考察を試みた。また、鑄造の由来と功德を述べる銘文の考釈と注説について、研究を加え、社寺名及び地名、鑄造の年月日、発願者または寄進者、鑄工などを明らかにした。実は、当時の日本では明治維新という特別な時代背景があり、それによって日本鐘の渡清が成立したと考えられる。1860～70年代の明治維新による廃仏毀釈運動のため、一部の日本鐘は胡雪岩に販売され、更に杭州に渡されたのである。岳王廟鐘を中心とする梵鐘はあらゆる文化遺産と同じように、過去の時代と文化の投影があると思われる。梵鐘を媒介とした交流によって、日中両国はそれぞれ同質の梵鐘文化を築きあげ、日中梵鐘文化圏を共有することになった。杭州岳王廟にある日本鐘は、清末における日中文化交流の特例といえよう。

キーワード：梵鐘 岳王廟 日本鐘 文化交流 廃仏毀釈

はじめに

杭州は、古くから「東南仏国」と呼ばれ、仏教文化の歴史が長く、関係文物も多く残され、梵鐘がその中の一例である。筆者は実地調査する過程で、杭州の岳王廟で意外に日本製の梵鐘と巡り合った。本稿は、杭州岳王廟の日本鐘を手かがりし、梵鐘をめぐる日中文化交流を探ってみたい。

日本においては、寺の鐘楼に吊されて、朝夕の勤行や大晦日に定期的に鳴らされている鐘のことを、梵鐘と呼んでいる。それは読んで字のごとく仏教に使用される鐘の意であり、寺院に不可欠な梵音具として大切に保存されている。加えて、時を知らせる鐘として寺院周辺の共同体の運営のためにも活用され、戦時には陣鐘として、軍勢の進退や陣中の合図のために鳴らされた。¹

¹ 五十川伸矢『東アジア梵鐘生産史の研究』、岩田書院、2016年、1頁。

中国においては、仏教寺院の梵鐘(仏鐘)のほかに、道教の鐘(道鐘)、朝廷の鐘(朝鐘)、時刻を告げる鐘(更鐘)があり、仏教の鐘と道教の鐘をまとめて、寺観鐘と呼ぶこともある。しかし、これらの鐘には、造型上からみて違いが認められないとされている。²

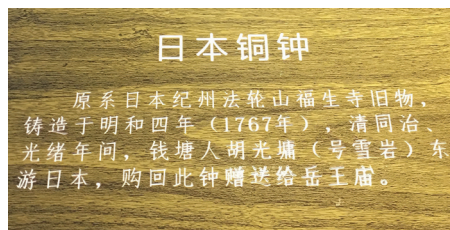
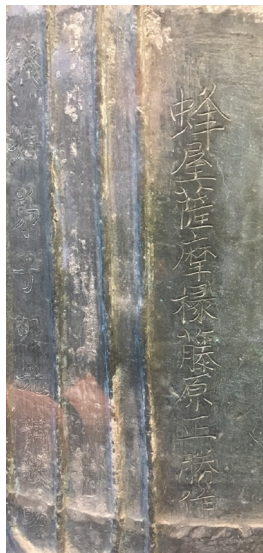
東アジアには、この類の梵鐘が分布するが、日本で生産使用されたものを日本鐘、中国のものを中国鐘と呼ぶこととし、和鐘や支那鐘という言葉は使用しない。³そこで本稿では、中国に伝来した日本製の鐘を日本鐘という名称で一括して取り扱うこととする。

一、岳王廟鐘の概況

岳王廟は、中国の浙江省の杭州市にある西湖北岸に位置し、南宋の名将で、漢民族の英雄として名高い岳飛を祭る廟である。岳王廟にある日本鐘は曾て杭州の衆安橋岳墓(岳飛の墓)に置かれ、中国文化革命のため、杭州下城の工場に運ばれて、水甕として使われていた。鐘の双龍紐帯及び龍頭は既に潰され、現在は文化財として岳王廟に保管されている。

岳王廟鐘の総高は三尺二寸、口径は二尺三寸二分の一、口廻りは七尺三寸、口辺の厚さは三寸、龍頭の高さは八寸である。⁴(換算すれば、総高は96.36cm、口径は71.19cm、口廻りは221.19cm、口辺の厚さは9.09cm、龍頭の高さは24.24cmである)

図1と図2が示すように、日本鐘の置き場に中国語の紹介文が付いている。そのほか、筆者は日本鐘に刻まれた銘文の所述内容を解釈した上で、意匠性を持つ銘文及び日本鐘そのものを、文化、宗教的な礼儀や日中梵鐘文化交渉史などと結びつけて考えてみたい。



² 全錦雲「北京古鐘文化放談」、『北京文物精粹大系古鐘編』、北京出版社、2000年、19頁。

³ 五十川伸矢『東アジア梵鐘生産史の研究』、岩田書院、2016年、1頁。

⁴ 米内山庸夫著、張慕騫訳「杭州及其付近之日本鐘」、『浙江図書館館刊』第三卷、第五期。1934年。

図1 中国語紹介文（筆者 図2 日本鐘（筆者撮）
撮）

図3 部分銘文（筆者撮）

二、鐘銘の考釈と註説

鐘の上部各区に「諸行無常」、「是生滅法」、「生滅滅已」、「寂滅為樂」という偈語が刻まれている。次に、偈語の意味について考察する。

[偈語の語解]

『涅槃経』に「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為樂」とあり、これを諸行無常偈と呼ぶ。

⁵これを和訳したものがいろは歌⁶の意味と一致すると思われる。日本のいろは歌は、『諸行無常偈』和訳したもので、弘法大師の作とも伝えられる。

「諸行無常」：「色は^{いろ}匂^{いほ}へど 散りぬる^ちを」この世のすべての存在は移り変わる事。

「是生滅法」：「我世誰ぞ^{わがよたれ} 常^{つね}ならむ」是がこの生滅する世界の法であること。釈尊は「一切のものは無常である。諸法は無我である。故にすべての存在しているものには永遠不滅なるものなどは内在しない」と示される。

「生滅滅已」：「有為^{うゐ}の奥山^{おくやま} 今日^{けふ}越えて^こ」生滅へのとらわれを滅し尽くすこと。

「寂滅為樂」：「浅き^{あさ}夢見^{ゆめみ}じ 酔ひ^ゑもせず」寂滅をもって樂と為すこと。「寂滅」とはやすらぎということ。我が滅しられ、煩惱の火が吹き消えた状態で、一切のものごとへのこだわり、とらわれの心がなくなった状態、やすらぎ、無や空の境地を示している。

また、鐘に次のような陰刻の銘がある。釈文を加えた語句については、銘の原文に罫線を付しておく。

銘文 奉獻弘法大師御寶前、願主阿闍梨朝應並講中、紀州上那賀郡粉川邑、法輪山福生寺現住朝雄、明和四丁亥天閏九月八日、蜂屋薩摩藤原正勝作。

[銘文の語解]

「弘法大師」：平安前期の真言宗の開祖として知られている。法名は空海、宝亀5年(774)6月15日生まれ、延暦23年(804)唐にわたり、長安青龍寺の恵果から真言密教の秘法をうける。嵯峨天皇・橘逸勢と共に三筆の一人に讃えられている。

「願主」：いわゆる信者、または依頼主であろう。

「阿闍梨」：高德の僧のことを指す。天台宗と真言宗では、役職名として使われる語でもある。

「講中」：講を作って神仏にもうでたり、祭りに参加したりする信仰者の集まりのこと。

⁵ 槌田満文『故事ことわざ辞典』。成美堂出版、2000年。参照。

⁶ いろは歌はすべての仮名を、同じ仮名を繰り返さずに読み込んだ、七五調の今様の形式をとった47字の歌。通常は各仮名を、清音で一字一字別々に読むが、歌の意味にそって漢字をあて、濁点をつけると、次のようになる。

色は匂へど 散りぬるを 我世誰ぞ常ならむ 有為の奥山 今日越えて 浅き夢見じ 酔ひもせず

「紀州」：日本の紀伊国の別称。今の和歌山県と三重県の一部の旧名である。

「那賀郡粉川邑」：那賀郡は、和歌山県（紀伊国）にあった郡、粉川邑は、現在の和歌山県の粉川町であろう。

「法輪山福生寺」：現在では、和歌山県紀の川市に位置し、真言宗山階派の代表である。

「明和四」：中国最古の歴史書である『尚書』に、「九族既睦、平章百姓、百姓昭明、協和万邦、黎民於變時雍」（「九族既に睦みて、百姓を平章し、百姓昭明にして、萬邦を協和し、黎民於いに變り時れ雍ぐ」）とある。「明和」は、1764年から1772年までの期間施行された日本の元号である。「明和四」はつまり、明和四年（1767）である。

「丁亥」：明和四年（1767）の干支という。

「閏九月八日」：明和四年（1767）の九月は閏月、つまり「閏九月八日」閏月の九月八日を指す。

「藤原正勝」：この日本鐘の鑄工である。

[注説]

岳王廟の日本鐘は、元々日本の紀州にある法輪山福生寺の銅鐘で、阿闍梨の朝応並びに信者の人々の依頼により、明和四年（1767）に蜂屋薩摩の藤原正勝が、製造した物である。弘法大師の信仰者が弘法大師様の御前に、この鐘を捧げ奉った。なお、鐘の縦帯に「錢唐弟子胡光墉敬助」という複鉤陰文があった。この銘文について、筆者は少し考察しておきたい。

[縦帯の語解]

「錢唐弟子」：「錢唐」は杭州の別称、「錢唐弟子」というのは寄進者の胡光墉の自称である。

「胡光墉」：道光三年（1823）安徽省績溪县に生まれ、名は光墉、幼名は順官、字は雪岩で、普通胡雪岩（1823～1885）と通称される。

「敬助」：敬意を持って寄進すること。

鮑志成氏「近通東瀛 遠達西欧」に次のように述べている。「清同治・光緒年間、杭州人の胡光墉が日本へ旅行した際、日本の銅鐘を何十ほど購入し、その内の十四鐘を持ち帰った。彼はそれらの日本鐘をそれぞれ本省の城隍廟、文昌廟、解神殿、神霄雷廟、東廟、吳山の廟、龍興廟、岳王廟、五雲山、雲栖寺、北高峰靈順廟、上天竺法喜寺、南星橋譙樓、天目山昭明寺に寄進した」⁷また、米内山庸夫氏『杭州及其附近に在る日本鐘』に、「胡光庸が其の全盛時代に日本から鐘を買って持って来て、杭州及び其の附近の寺々に寄進したのだ。何れにしても今から六十年も前、未だ汽船などと云ふものと発達しない交通不便な時に、あの大きな日本鐘を五十も日本から杭州まで持って行ったのである。其鐘の多くは原と大阪や紀州の寺々にあったのを見ても、恐らくは堺あたりから船積みして、春汎に帆を揚げて、浙江省の寧波に到着し、其處から更に運河で杭州に運んだものであろう」⁸と記されている。二つの記述によれば、この日本鐘は清国の

⁷ 鮑志成「近通東瀛 遠達西欧」、周峰編『元明清名城杭州』、浙江人民出版社、1990年8月、77頁。

⁸ 米内山庸夫著、張慕騫訳「杭州及其附近之日本鐘」浙江図書館館刊、第三卷、第五期。1934年。

胡光墉によって購入され、更に岳王廟に寄進されたことが明らかになった。鐘の寄進者の胡光墉は、清末の有名な実業家である。上述のように、この鐘は明和四年（1767）に製造された物であるため、「錢唐弟子胡光墉敬助」という銘は前にあった銘の上に覆いかぶせて二重に刻してあり、鑄鐘の際に刻したのではなく、後で刻したものと思われる。恐らく寄進者の胡光墉が岳王廟に寄進するときに彫りつけたものであろう。

三、梵鐘をめぐる文化交流

1、日本鐘の渡清経緯

さて、この日本鐘は、どのような経緯で遥々日本から岳王廟にやってきたのであろうか。おそらく渡清の年代は、同治・光緒年間であった。明治維新前後に当たる日本において、廃仏毀釈が行われたのである。慶応三年(1867)十二月九日、「皇政復古」の大号令といわれる「郷等国家の為に尽力せよ」から始まる勅諭が喚発され、明治史の実質的第一歩と神仏分離、神道国教化が始まったのである。本地などと称えて仏像を社前に掛け、或は金鼓(鯛)、梵鐘、仏具等の類を置いている所は草々にとり除く可き、社僧の廃・神宮寺の移転又は破却、寺院内鎮守神の移転等は、少し激しくなると、無檀又は極く少ない檀家の寺院を廃寺にしており、又野にある石仏等の廃棄他への転用も行われている。⁹

上述のように、明治維新と呼応した廃仏毀釈運動で、日本の仏教は、大きな衝撃を受け、仏教寺院・仏像・経巻および銅鐘などの施設が破毀され、僧尼など出家者や寺院が受けていた特権も悉く廃除された。そのような背景で、一部分の日本鐘は、安い値段で胡光墉のような外国人に販売され、更に遥かな海外に渡せたのであろう。

これらの鐘の日本における素性、並びに胡光墉の手に渡った経緯を研究したところ、日中交流だけでなく、廃仏毀釈の一側面としても極めて興味深い話である。一方、古来中国で、多くの美術品や文物が失われ、日本で保存するのに対して、日本にあれば失われ、鑄潰され廃滅したのであろう。一部分の日本梵鐘が中国で完全無欠に保存されていることは、日中文化史上に極めて有意義であろう。

2、梵鐘を媒介とした日中文化交流

神崎勝氏は『都氏文集』巻三「大唐明州開元寺鐘銘一首並びに序」を引いて、「乙酉の年(865年)2月15日に日本国の沙門賢真は謹んで同鐘一口を造った。初め賢真は、入唐時に、現在の寧波周辺にあった明州の開元寺にたどり着いてとどまったが、梵鐘を造って贈ることを約した

⁹ 熊谷定義『廃仏毀釈物語：その歴史と松本藩の廃仏毀釈』信毎書籍出版センター、1997年8月、38-40頁。

のを実行した」¹⁰と記されている。これはまさに唐の時代における梵鐘の日中交流だと思われる。また、北宋の官僚宋迪(11世紀後半頃～没年不詳)は、長沙に赴任した時に山水図を描いた後、この画題が流行して瀟湘八景となり、鎌倉時代後期に日本へも流入した。瀟湘八景の一つである「煙寺晚鐘」は、「夕霧に煙る遠くの寺より届く鐘の音を聞きながら迎える夜の情景」を示し、近江八景にみえる「三井晚鐘」などが日本人好みの文化的景観として継承されており、童謡夕焼け小焼けにも「山のお寺の鐘が鳴る」として「煙寺晚鐘」の文化的景観が歌いあげられ、日本人の心の中に深くしみこんでいる。このような文化的景観の伝播も、東アジアの各国に展開した梵鐘文化の重要な一形象ととらえられる。¹¹西湖十景の一つ、「南屏晚鐘」も梵鐘にまつわる文化的景観だと考えられる。「南屏晚鐘」は、南屏山の麓に位置する杭州浄慈寺の鐘の音を聞きながら、眺める夕景を表す場面である。杭州浄慈寺は、江南五大禅院の一つで、日本の曹洞宗の開祖・道元の師如浄禅師の墓が所在地である。1984年11月、浄慈寺は、日本の曹洞宗大本山である永平寺の援助によって大梵鐘が再建された。1986年、日中の仏教関係者数百人が浄慈寺に集まって、大梵鐘落成法会を開催した。

梵鐘を媒介とした交流によって、日中両国はそれぞれ同質の梵鐘文化を築きあげ、日中梵鐘文化圏を共有することである。ここに至って梵鐘は、もはや国家や民族に縛られることなく、まるで生き物のように国境を超え、山を通り抜け、根を下ろし、互いの文化に響き合うのである。

終わりに

本稿は、実地調査の結果及び収集した文献資料に基づき、杭州岳王廟にある日本鐘の概況、鐘銘の内容、渡清の時代背景及び梵鐘をめぐる文化交渉などについて可能な範囲内で考察を試みた。その中、とりわけ銘文の考釈並びに寄進者を通して、日本鐘の元所在地、職人、鑄造時間、偈語の意味、日本廃仏毀釈の側面史、及び梵鐘にもたらした文化交渉などを明らかにした。杭州岳王廟にある日本鐘は、日中文化交渉における実物交流の一側面と見られる。これらの梵鐘は、日中両国を舞台に、環流の盛況を呈するようになり、まさに梵鐘を媒介とした日中文化交渉の魅力ではないか、と。

¹⁰ 神崎勝「中国鐘の分類について」(『梵鐘』第12号、2000年)を参照。

¹¹ 堀川貴司『瀟湘八景-詩歌と絵画に見る日本化の様相-』臨川書店、2002年、参照。